

その若き我に似たれば木木の芽を生命のごとく
なつかしむかな

たた一人泣かんとて來し松林こゝにも人の往き
かひてをり

いらたゝしき心に見やる海原に大浪たたす物た
らぬかな

忘れ得ぬ事おほかりきかくとのみ書きとどめた
る今日の日記かな

今日もまた昨日のごとく過すらし髪のかたちの
つゆもたかはぬ

わか髪の思ふがまゝに結はれしに心たらひぬ初
夏の朝

櫛の齒のあとありゝと前髪に見ゆるうれしき
湯上りのあと

何となく落ちぬ心地うつくしき櫛をさしぬと
いふことに

あたらしくペンとりかへし書き心地あらぬ人に
も文かきて見つ

月白う櫻こぼるゝ春の夜は秘めたる夢もかたら
まほしき

湯上りのすかくしさにうかれ來て飴細工など
買ひし縁日

いさゝかのの足袋のよごれのそれにだにしづ心
なきこの日ころかな

坂道をくだる車のこゝちにて過こしがたなき我
れの一生

水 鳥 横井まきの

水鳥と我ひとりどがはてしなきみ空のもとにも
だしあふかな

相もたし互互の思ひ出をたとりてあれは蛙なき
いづ

浪の音と太陽の光とにむかひる我的小ゝか
なしいかなや

三保がさき清水に通ふ出で舟を待つま淋しき旅
の夕暮 (以上三保にて)

山そひの村に煙の立ち初めぬまた力なき生がは
じまる

ほかゝと春の光の吸はれゆくさ青の草のゆた
けきふくらみ

二百里をへたてゝ母を慕ふ子が夕々にあけて見
る窓

ひるの雨に少し濁れる川の水おほる月夜にうす
光する

亡き人のくしげに残る櫛のはにからみ合ひたる
毛すじ悲しも

惜しげなく櫛をボキリと折り捨てぬ髪のもつれ
の悲しうなりて

わけもなく腹立たしうて折りし櫛またつきて見
る悲しき心

髪 安 吉 ます

風そよと若葉のかげにふき入れば洗ひ髪よりつ
げの櫛おつ

女子を見れば忍ばる桃色の輪櫛をほしとおもひ
たるころ

嫁ぐ日にちたりかねたむ我姉のくろかみにさす
鼈甲のくし

水

齋藤れい

我が思ふことはあくまでなまましといふがごと
くに水はひろがる
幾日か知らでありつる地のしめりゆたけき見れ
ば涙ぐましも
夕されば鶏はおとなしとやのうちに三羽ならび
て羽ばたきもせず
さはやかに風ふきわたる坂の上に青水無月の空
を見て立つ
鳥なけば梢しげればことごとくに水無月旅のみち
おもはしむ

ほそくく夏の夕の雨降れば物なつかしみかさ
さして出づ
眼をそぢて心しづかに雨だれをきくがうれしき
初夏のよひ
太陽のかけに立木のかげの織りみだれ初夏の日
の暮るゝしづけさ
黒き眼の小鳥二つがまるまごにわれを見てある
朝のよろこび
夕かげる太陽を背にあびて草しげば草のそこよ
りつめたさの來る
おもひうみまぶた静にふたぐ時我が世の急にひ
ろくなりけり
かにかくに眼さへとづればうら安き我が世なり
けりこのまゝに居ん

移轉の日

ひさ葉

リンリンの鈴の音にむくりとはれ起きた、何故今朝はこん
なに早く起きるのか知らず自分で自分を疑ふ、あゝさうさう
今日は移轉の日だ、昨夜寝る時明日は早く起きて荷物の整理
をするのだと、固く心を定めて寝たのだつた、昨日二ツの行
李を整理して了つたので残るのは一つ、それを引つくりかへ
して夫れ／＼處分する、化粧水の瓶の一寸形のよいのは取つ
て置いたのが幾つも出る、不用の紙や一年の時のノートの、
書きぬきなどは皆ペリペリ横破り、中には柔い紙もあるので
勿体ないまで、チンと鼻をかんで捨てる、七時頃には大抵終
つた。それから夜具、大風呂敷を室一ぱいに廣げて一枚一
枚に包む、こんな事をしてる間にも此處を去る悲しさが時々
堪へられぬ様に胸に迫つて來る、手拭かふつてハタキをかけ
塵一つない様に掃除してこれが最後と鴨居まで一々雑巾をか
ける、八時過ぎにはすつかり終つて了つた、あゝ、これでこ
の二階からの見物もたしまひださ、窓際のればしまに凭つて

すぐ目の前の櫻や向ふの大椎の木を見飽きるまで見廻した、
九月から見なれたこの景色、今櫻の花の盛りになりかけるの
を後に見て、去らねばならぬ悲しき淋しさに胸が迫つて來る、
私はまばしまにかけた手の甲の上に額をつけて、うつ伏して
眼をさした。頭の中には去年の室がへの時のわびしさが、ひ
ししと胸をついて來た、あゝあの淋しき悲しさを又繰り返
返すのだ、いつか手の甲に生温い感じがするので、ふと顔を
上げるさぬれてる、眼がしょぼしょぼとして來た、耻しくなつ
て友に見付けられぬ様にさ、又うつ伏した。朝夕聞き馴れた
豆腐屋の聲がする、いつもの犬が鳴く、あゝ、それさへなつ
かしい。「どうしたの！」ふと友に呼ばれて、顔を上げた、一
年間同室で睦み合つた友、その友にさへ別ればならぬ、いよ
いよ最後のお別れに好きなキンツバでも喰べ様さ、友と二人
岡野迄行つた、そして食事をすまして森川の寄宿舎を出る、
玄關は出る荷入る荷入る山の様、長い間通ひなれた大學前の道
をてくてく歩き乍ら、本舎につくさ此處も戦場の様、蟻が物
を運ぶ様に蒲團や行李を二三人して、あつちにつつかり、こ
つちに突き當りして運んである、赤城揚場の皆様さも久しぶ